

ベトナム・ホーチミン市の華人プロテスタント教会

—1960年代における潮州人教会の設立—

The Chinese Protestant Church in Ho Chi Minh City, Vietnam:
Establishment of a *Chaozhou* (Swatow) Church in the 1960s

芹澤 知広*

Satohiro SERIZAWA

I はじめに

本稿の目的は、平成22年度に奈良大学総合研究所の研究助成を得て行われた研究「1930年代から60年代にかけてのベトナム華人社会における宗教活動」の成果について報告することにある。

筆者は、1993年12月に初めてベトナム・ホーチミン市を訪れて以来、その地の華人（中国からの移民とその子孫、今日のベトナムの民族分類では「ホア族」）の宗教施設について、歴史的・民族誌的な立場からの調査を行っている。今まで比較的多くの情報を収集した華人会館（民間信仰の廟を兼ねる）、カトリック教会、仏教寺院については、関係する拙稿をすでに公刊した [Serizawa 2006; Serizawa 2007; 芹澤 2009; 芹澤 2010]。

本稿では、今まで収集した資料のうち、プロテスタント教会に関する情報を紹介したい。本稿執筆の意図としては、キリスト教という「普遍宗教」、「世界宗教」に見られる民族性の問題を、1930年代から60年代にかけてのベトナム華人社会のなかのサブ・エスニック・グループに着目して探るといふことがある。

筆者が今まで調査を行ってきたベトナム・ホーチミン市の華人カトリック教会の場合には、華人のサブ・エスニック・グループ間の差異の問題は現在ほとんど顕在化していない。このカトリック教会では、日曜日に時間を区切ってベトナム語と広東語のミサを行っている。ベトナム語のミサに出るキン族（ベトナムの多数派民族である「ヴェト族」）信徒の数が多く、広東語のミサに出る華人の信徒は少数派となっており、民族の境界については、キン族と華人のあいだの問題が重要となっている。

いっぽうで、このカトリックの教会堂が建設された1900年時点では、この教会堂が、もっぱら華人のために建てられたという事情もあり、華人のあいだでの民族の境界の問題が重要であったことを想像できる。信徒が教会に寄付した扁額と対聯が今も教会堂の入口に掲げられているが、

扁額には「廣東」、対聯には「福建」という文字が書かれてあり、広東人信徒のグループと福建人信徒のグループが競って、新しい教会堂の建設に貢献したことがうかがえる。

しかし、本稿が主として扱う1960年代から70年代にかけての時代には、華人信徒のあいだのサブ・エスニック・グループは、華人カトリック教会においてそれほど重要性をもたなかったのではないと思われる。筆者の情報は、主としてこのカトリック教会において当時働いていた神父や、神父になるために勉強をしていた修道士の情報にもとづいている。フランス人や中国人の神父の幾人かは、中国の広東省・広西省（現在の広西チワン族自治区）から1950年代以降にベトナム南部へ来ている。広西省の華人サブ・エスニック・グループ（例えば、中国では「チワン族」となっている「ヌン族」など）についての特別な知識が生かされることはあっても、華人やキン族の信徒に対しては、それぞれ広東語とベトナム語が主たる媒介言語になっていて、福建語や潮州語に代表される華人のあいだの民族的な差異はそれほど重要ではなかったと思われる。

また、当時ベトナムに学んで後に神父となった華人修道士にも、潮州人と広府人の両方の出身者がいて、必ずしも特定のサブ・エスニック・グループに特化していなかったことがうかがえる〔芹澤 2010〕。なお、ベトナム・ホーチミン市の華人のサブ・エスニック・グループの構成では、広府人（広東省広州府周辺の出身者）が半数を占め、その次に多いのが潮州人（広東省東部の潮州府周辺の出身者）にあたる。

プロテスタント教会の場合は、後述するように、この時代につくられた教会のなかに、当初から福建語と潮州語（潮州地方は福建省に隣接しており、潮州語は福建語に近い）が媒介言語となり、福建人と潮州人に特化した教会があった。そして、そのなかから、さらに潮州人のみに特化した教会「生命堂」が生まれてきた。以下では、このプロテスタント教会と潮州人の関係に焦点をあてて紹介する。

II 広東省潮州地方におけるプロテスタント宣教

19世紀に始まる広東省潮州地方のプロテスタント宣教の問題については、ジョゼフ・リーや、蒲豊彦の著作など、内外ですでに多くの優れた研究がある〔Lee 2003；蒲 2003〕。ここでは、そのなかで胡衛清の論文に依拠して、簡単に経緯を紹介するととどめたい〔胡 2001〕。

胡衛清によると、一般にはスイスのバーゼル会（The Basel German Evangelical Missionary Society）のルドルフ・レフラー（Rudolf Lechler）が1848年に宣教したことをもって、潮州地方へのプロテスタントの伝播のはじまりとすることが多いが、それより以前にカール・ギュツラフが2度、潮州地方を訪れているという〔胡 2001：149〕。

ギュツラフはプロシアに生まれ、オランダ宣教会（Netherlands Missionary Society）の牧師として1826年にバタビアへ派遣されたが、1829年にオランダ宣教会を離脱してシンガポール、マラッカ、バンコクを回って宣教した。その過程で、多くの潮州人と接触している〔胡 2001：149〕。また、ミャンマーで宣教にあたっていたアメリカのバプティスト会の宣教師、ジョーンズ（J. T. Jones）は、夫人とともに1833年にバンコクへ派遣され、その年3名の洗礼志願者を得たが、3人ともが潮州人であった〔胡 2001：150〕。このように潮州人のプロテスタント入信は、海外の潮

州人社会で先に始まっていた。

ギョツラフは、1848年に「福漢会 (China Union)」という組織を広州でつくり、貧しい中国人を雇って中国本土の宣教に従事させることを始めた。この福漢会の会長として「明」という名の潮州人がいたことが知られている [胡 2001:150]。この福漢会の活動の一環として、ギョツラフの指導の下、潮州地方への潜入を試みたのが、レフラーであった。レフラーは、1849年以降、澄海県の鹽灶村に留まり宣教活動を行ったが、1852年に潮州府の政府が領域内での宣教を禁止すると、香港へ帰り、以後、バーゼル会は潮州人ではなく客家人への宣教へと転換した [胡 2001:151-152]。

1856年には、ウィリアム・バーンズ (William Chalmers Burns) とハドソン・テイラー (Hudson Taylor) の2名のイギリス人宣教師が来て、スワトウ (汕頭) 周辺で活動した。ある現地の役人への治療がきっかけで、スワトウに病院を建てる計画が持ち上がり、テイラーは、自分の医療機器を取りに上海へ戻った。しかし、上海に到着すると、その機器は火事によってすでに燃えてしまったことがわかり、以後スワトウに戻ることはなかったという [胡 2001:153-154]。その後、テイラーは、1865年に「内地会 (China Inland Mission)」を創設した。テイラーは「載徳生」という中国名を通してよく知られており、中国のプロテスタントの歴史のうえでは、著名な外国人宣教師の1人である。

1858年に清朝が第二次アヘン戦争に負けて天津条約を結ぶと、潮州 (後にスワトウ) が対外的な港として開放されることになり、プロテスタントの宣教に有利な条件が整った。同年、イギリス長老会は、スワトウをイギリス長老会の中国内の一教区として認め、本格的な宣教の足掛かりとした。イギリス長老会は、医療と教育を宣教の手段とすることで、宣教師が単独で旅行して布教するという今までの方法をこえて、大きな成果をあげた [胡 2001:156-157]。

アメリカの宣教師は、イギリスに比べて遅い時期に潮州地方へ入った。1845年のアメリカでは、南北戦争を契機としてバプティスト会のなかでの組織の分裂が始まり、北部諸州のバプティストは、アメリカ・バプティスト会「真神堂 (American Baptist Missionary Union)」をつくった。この真神堂の宣教師のウィリアム・アシュモア (William Ashmore) が、1858年にバンコクから香港経由でスワトウへ来て活動を始めた。いったん病気のためにアメリカへ帰国したが、1863年から再度スワトウに戻って活動した。その後、バプティスト会の宣教活動も大きな成果をあげた。胡衛清は、アメリカのバプティスト会の統計を紹介し、イギリス長老会の統計の数字と比較して、バプティスト会に医療伝道の数字がないことを除けば、どちらも遜色がないものであると指摘している [胡 2001:159-160]。

イギリス長老会とアメリカ・バプティスト会は、潮州地方内の客家人集住地域にも広まったが [胡 2001:160-161]、いわゆる潮州語を話す潮州人のプロテスタントに代表的な会派となった。後述する香港の「生命堂」でも、この2会派がともに尊重されて共存している。

Ⅲ 香港における生命堂の設立

李金強らが著した香港の潮州人教会「生命堂」の百年史に詳述されているが、「生命堂」とい

う名称は、香港につくられた潮州人のプロテスタント教会に端を発する [李他 2009]。

スワトウの特産品として有名な「抽紗」(ドロンワーク、抜きかがり刺繍)を香港で商う潮州人は、20世紀の初めに香港華人基督教青年会 (Hong Kong YMCA) の会所を借りて、礼拝の集会を行い、後に雲咸街 (Wyndham Street) に礼拝堂を設けた。そして1911年にスワトウの長老会に牧師の派遣を依頼した。その後、言語がほとんど同じであるという理由から福建省・アモイ (厦門) の信徒が、この教会に参加したため、教会の名称は「香港汕厦堂会」と名付けられた [李他 2009: 54]。しかしこの教会は、組織と経済基盤が不安定であったため、第一次世界大戦の勃発で経済状況が悪くなると消滅した [李他 2009: 56]。

第一次世界大戦の後、この香港の潮州人教会は、1923年に最初の理事会を結成して復活した [李他 2009: 60]。そして、当時中国全土でキリスト教会の自立と土着化の機運が盛り上がっていた影響を受けて、1928年には「旅港潮人中華基督教会」と改称し、1930年代には「旅港潮人中華基督教会」という名称を正式なものとした [李他 2009: 61]。

この名称をさらに変更するという動きが、香港の日本占領期が終わった1940年代後半に生じた。その経緯を香港の生命堂の百年史から詳しく辿ると以下のようである。

バプティスト会とスワトウの自立教会の両方の背景をもった呉恩溥が、1946年に香港の潮州人教会に来てから、「旅港潮人中華基督教会」という名称は長すぎるので、変える必要があるのではないかというアイデアを出した。当時、この教会の出身で伝道主任をしていた蔡欽光が「我来使羊得生命」というタイトルで説教をし、教会の事業が聖書の原則に合っているかどうかを再検討することが始まった。そして、理事会副主席の徐子祥が、この教会は「堂 (Congregation)」であって「会 (Church)」ではないという考えを提起して、「旅港潮人中華基督教会」という名称を変更することになった [李他 2009: 98]。

1947年1月から数度にわたり、新しい名称が検討されたが、すぐには決まらなかった。2000年代に李金強らが、当時議論に加わっていた呉恩溥牧師に聞き取りをしたところでは、呉恩溥が最後に「生命堂」という名称のアイデアを出した。その理由は、命がある(「有生命」ということがキリスト教の信仰にとってもっとも重要であるということ。そして、その次の理由は、シンガポールの竹脚とベトナムのサイゴンの潮州人教会が「生命堂」という名をもつので、すべての名称を統一すれば、大家族のような潮州人のまとまりを表すことができるということであった。1947年の2月末に理事会は、「潮州基督教生命堂 (Swatow Christian Church)」と改称する決定をした [李他 2001: 98-99]。

この呉恩溥牧師の言明は、2000年代の時点での発言であるということに十分留意する必要があるが、当時の香港の潮州人プロテスタント教会関係者が、シンガポールやベトナムの状況によく通じており、中国国外の潮州人教会との連携を土台にして「潮州人」としてのアイデンティティを強くもっていたことをうかがうことができ、たいへん興味深い。しかし歴史的な事実としては、今後の確認が必要である。後述するように、また李金強らも注で紹介しているように [李他 2009: 108]、ベトナムの生命堂の設立は、1960年代に生じた出来事であり、「生命堂」という名称は、先に香港で提出されている。

シンガポールの生命堂については、その設立年は李金強らも注には記載しておらず [李他

2009：108]、筆者も未だ詳しくは調べていない。現在も潮州語を用いた活動を行っているシンガポールの生命堂（Singapore Life Church）のホームページに載せられている年表によると、この教会は1883年に設立され、当初は「竹脚堂」という名称であった。その後1902年に武吉智馬（Bukit Timah）の教会、后港（Hougang）の教会と合併して「竹声堂」がつくられた。1919年に竹声堂が自立して「竹脚堂」を名乗った。1927年には「竹声生命〔ママ〕（Say Mia Tng Teck Khah）」と改称した。そして1975年になって、「新加坡生命堂」と改称した〔新加坡生命堂 制作年不詳〕。

「Say Mia Tng」は「生命堂」の潮州語発音をローマ字化したものである。1927年にすでに使用されていたとしたなら、香港よりも先にシンガポールの潮州人プロテスタント教会で「生命堂」という名称が使われたことになる。

Ⅳ ベトナム・ホーチミン市（旧サイゴン）の華人プロテスタント教会の起源と発展

ベトナム・ホーチミン市の華人プロテスタント教会の起源は、そのまま、ベトナムにおけるプロテスタント教会の起源となる。

現在のホーチミン市の華人プロテスタント教会を設立したジャフレイ（R. A. Jaffray）牧師こそ、1911年にベトナムを宣教に訪れた最初の宣教師の一人である。現在のベトナムにおいても、福音がベトナムにもたらされた起源の年として1911年を位置付けている。しかし船戸良隆が書いているように、1804年に設立された英国聖書協会の年報に初めてベトナム関係の記事が現れるのは1824年であり、マラッカからコーチシナ（ベトナム南部）へ中国語訳の聖書がもたらされたことがわかるため、福音の伝播としては1911年よりも以前に行われていたと考えることができる〔船戸 1991：310-311〕

ジャフレイら、1911年に中国からベトナムへ来た3人の牧師は、いずれも「宣道会（Christian and Missionary Alliance）」に属していた。宣道会は、カナダ出身のシンプソン（A. B. Simpson）が、もともと相互に密接な関係にあった「基督教聯合会（Christian Alliance）」と「国際伝道会（International Missionary Alliance）」とを統合するかたちで、1897年にアメリカで設立した宣教団体である。ケネス・ラトゥレットは、内地会と宣道会とを比較して、未だキリスト教徒がいない場所へと宣教師を派遣する超党派団体ということでは宣道会と内地会は似ているが、宣道会は内地会とは違って中国だけに精力を集中させることはなかったと指摘している〔頼 2009：341〕。また、19世紀末の当時、安徽、北京、上海、天津を除いては、宣教活動を続けていくことが困難な地区ばかりで、そのなかでも広西省は、少なくとも3つの宣教団体が過去に失敗していた。それにもかかわらず宣道会は、初めて長期的にプロテスタント宣教の基地を広西省に設けることに成功した〔頼 2009：341〕。この中国広西省から、隣接するベトナムへと福音が伝わった。

ジャフレイ牧師はカナダ・トロントで1873年に生まれた。シンプソン牧師がアメリカ・ニューヨーク州ナイアック（Nyack）に設立した聖書学校で学び、1897年に中国に派遣され、1899年からは広東省と広西省の境界にあり、広西省宣教の基地となっていた梧州に駐在した〔林 1981：24-39〕。

宣道会の創始者のシンプソン牧師は、1887年には早くもベトナムを訪れている。その後、1892

年にアジアを再訪した時には、自身が中国広西省を訪れている間にベトナムのサイゴンを訪れた宣教師と、後日シンガポールで落ち合い、ベトナムでの宣教の必要性をその宣教師から聞いて、ベトナムと広西の宣教を同時に行うことを決めたという。そのため、ジャフレイ牧師は、中国に来て1年後の1898年には早くもベトナムを訪れていた [林 1981: 62-63]。

1911年にジャフレイ牧師ら3人がベトナム中部のダナンに到着した。たまたまダナンで聖書の普及を行っていたフランス人のボネが北部のハイフォンへ移ることになり、その事務所を譲り受けて宣道会のベトナム宣教の基地が設けられた。1916年には、ジャフレイ牧師が再度ベトナムへ赴き、フランス人の総督に会って、ハイフォン、ハノイ、ダナン、コーチシナ、ラオス南部での宣教の許可を得た。ダナンでは、入信したベトナム人官吏のための聖書の教室が開かれるようになり、その後、1921年にこの教室が基になって聖書学校が誕生した [船戸 1991: 316-320]。

コーチシナの華人教会の始まりは、ジャフレイ牧師の命を受けて1921年にチョロン（現在のホーチミン市第5郡を中心とする華人の集住地区）に派遣された朱醒魂牧師がチョロンの参辦街（現在のタンダー通り）に礼拝堂を設けたことに始まる。翌1922年には、ジャフレイ牧師、オールセン (J. D. Olsen) 牧師、朱牧師と40数名の信徒が集まり、教会の成立が宣言された [楊他 1971: 19]

1923年に礼拝堂は、梅山街（現在のグエンチャイ通り）へ移り、さらに1924年には順橋街、1925年には水兵街（現在のチャンフンダオ通り）へと移っている。これらはいずれも借家で、1929年になって霞飛將軍路（現在のグエンチャイ通り）の広肇医院の隣の土地を買い、1932年から教会堂を建設して、1933年から使用を始めた [楊他 1971: 19-20]。この教会堂が、現在の「光中堂」になる。

最初にこのチョロンの教会を預かったのは、朱醒魂牧師である。朱醒魂は、中国広東省広州市の西関にあった著名なアクセサリー店「朱義盛」を経営した朱一族の出身で、広西省梧州に設けられ、現在は香港の長洲島にある著名な聖書学校「広西建道聖經学院（建道神学院）」で学んだ。「建道学生佈道団」の初代団長でもあり、ベトナムや現在のインドネシア（当時のオランダ領インド）など海外で宣教を行った最初の中国人であった [建道神学院跨越文化研究系編 2009: 78]。

1927年に朱醒魂牧師が、インドネシアへ宣教に赴くと、鄭科林（1929年に牧師となる）が引き継ぎ、1930年に鄭科林がインドネシアへ宣教に赴くと、韋郁良（1931年に牧師となる）が引き継いだ [楊他 1971: 19-20]。

また1929年には、当時すでにインドネシア宣教に力を注いでいたジャフレイ牧師の発案で「中華国外佈道団」が設立され、チョロンの教会はその第一の基地となった。1951年から1953年にかけて中華国外佈道団の団員としてベトナムで働いた羅腓力牧師が書いているところによると、中華国外佈道団がつくられる前は、東南アジア（「南洋」）へ宣教に行く宣教師の費用は、ジャフレイ牧師か、宣道会会長のレイダー博士 (Dr. Paul Rader) が私財を投じて工面していたという。著名な中国人宣教師・王戴博士 (Dr. Leland Wang) を団長とする中華国外佈道団ができてからは、ジャフレイ牧師を尊敬する華人信徒が中華国外佈道団のために金銭を奉獻するようになったが、中華国外佈道団にかかる費用は少なくとも、そのための資金が必ずしも保障されてはいなかった [羅 1997: 186-189]

なお、光中堂と、次節で紹介する平西堂とは別に、今日「宣道会」と呼ばれている華人プロテ

スタント教会の礼拝堂がチョロンにある。梧州から来た宣道会のアメリカ人宣教師、ヘンリー・ホートン（Henry Horton）牧師が1953年に主任となり、チョロンの「古都街」（現在のハイトゥオンランオン通り）に宣道会の関係者が布教所を設け、「華僑基督教宣道会」と名付けて始めた教会である。1956年には前述の羅腓力牧師が主任となり、新しい教会堂建設の計画が始まった。そして、1960年に現在の「宣道会梁汝学堂」が落成している [陸 1969：8]。

V ベトナム・ホーチミン市（旧サイゴン）における生命堂の設立

生命堂のもとになるプロテスタント教会は、現在のホーチミン市第6郡にある「越南華人基督教平西礼拝堂」（略称「平西堂」）にあたる。

この平西堂を創設したのは、福建人の許漢隆牧師である。チョロン出身で、光中堂で奉仕した張志江牧師の著作『活水南流』によると、許漢隆は、もともと許漢龍という名を持ち、その父親はメコンデルタのベンチェ省でレモン農園を経営する敬虔なキリスト教徒であった。そして、許漢龍は、1934年7月、18歳の時にベンチェからチョロンへ来て洗礼を受けた [張 2006：76-77]。

許漢龍は、1938年の6月に宋尚節博士（Dr. John Sung）がチョロンに来て宣教の大会を開いた時に感銘を受け、キリスト教の専従となることを決めた。そして、ダナンの聖書学校に入学した。その間、聖書のなかで「龍」が悪魔の象徴として使われていることを知って、自身の名前を同じ発音の「隆」に変えたという [張 2006：78]。

その後、許漢隆は、1941年4月に光中堂の伝道員の職に就いた [楊他 1971：21]。

当時、チョロンの北のライティウとさらに北のタンフォクカイン（新福慶）には、福建人信徒が6家族あり、1942年には光中堂の分堂としてライティウに礼拝堂が設けられた。日曜日、午前には光中堂で韋郁良牧師が説教をし、許漢隆は同時に水兵街の礼拝堂で説教をし、終わると午後には一緒にライティウの礼拝堂へ行き礼拝を主宰した。ライティウの近くにはキン族の信徒も6家族あったため、韋牧師がベトナム語で説教をした時には許が福建語（廈門方言）に翻訳し、許が福建語で説教をした時には、韋牧師がベトナム語に翻訳したという [張 2006：78-79]。

1943年7月に許漢隆はチョロンの伝道員の職を辞し、9月からダナンの聖書学校へ戻り、勉強を再開した。1944年に卒業してからは、チョロンへは戻らず、父親のいるベンチェへ帰った。そして、1946年から1956年までの10年間、許漢隆はカンボジア・プノンペンの華人プロテスタント教会の牧師をした [張 2006：79-80]。

許漢隆が、1956年に一家揃ってプノンペンを引き払い、チョロンへ戻って平西堂を創設するきっかけとしては、張志江牧師が、自身の見聞を踏まえて興味深い事実を紹介している。

ダナンの聖書学校出身で、カンボジアで宣教をしていた許春が、プノンペンとバタンバン（馬徳望）に礼拝堂を創設していたが、この2つの場所は200キロ以上離れていたため、カンボジア華人の多数派にあたる潮州人が話す潮州語のできる許漢隆を招聘して、プノンペンの礼拝堂の牧師にしたという。許春自身も潮州人で当然潮州語ができたが、自分の中国語が許漢隆ほどうまくないため、首都プノンペンの教会を許漢隆に譲って、自分は地方都市の教会の牧師に甘んじたという [張 2006：79-80]。

しかし、潮州語ができるということでプノンペン教会の牧師となった許漢隆は、この地の広府人女性のネットワークに駆逐されることになった。1951年11月に張志江がチョロンから劉堅と何説真の2名の女性の伝道員を連れて、プノンペンへ行った時には、プノンペンの広府幫の幫長をしている劉燥の家に泊まった。劉燥の夫人は熱心なキリスト教徒で、喜んで劉堅と何説真の世話をしたという。また、1953年にプノンペンの中国銀行の宿舎に泊まった時には、張志江は、中国銀行プノンペン支店長・趙汝南の夫人で、香港の著名な華人リーダー、何東（Sir Robert Ho Tung）の娘にあたる何晴灝から、許漢隆牧師と中国広西省梧州及び香港から来た2人の女性伝道員とは、出身地や教育背景が異なるから、うまくやっっていけないということを直接に聞いていた。張志江がまとめているところでは、プノンペン教会に多大な金銭的貢献をしているのは、劉燥夫人や趙汝南夫人など広府人で、後にこの教会に派遣された西洋人牧師である、ヘンリー・ホートン（前述）とコールズ（A. G. Kowles）も、かつて梧州で働いていたため、2人の女性伝道員とは親しかった [張 2006 : 80-81]。

その後、張志江牧師が許漢隆牧師と会った時には、許漢隆も2人の女性伝道員と一緒に仕事を続けていくことができないという自覚があったという。そして、ちょうどそのころ、チョロンの潮州人信徒と福建人信徒が団結して、潮州語と福建語の両方ができる牧師を探していたため、許はチョロンに戻って潮州人と福建人のための教会を設立することになった [張 2006 : 81-82]。

1954年に平西堂ができた当初は、日曜日の午後2時30分に礼拝の集会をもち、10人ほどの出席者がいたにすぎなかった。1955年には、集会の人数は40人を超えるまでに増え、礼拝の時間は日曜日の午前9時に変更された。1956年に許漢隆牧師を代表として、黄榮遠置業公司から現在の平西堂の土地を買って、教会堂を新しく建てることになった。そして1956年8月21日に起工式を行い、翌1957年に完成した [越南華人基督教会平西礼拝堂 2011 : 24]。

現在、平西堂があるカオヴァンラウ通りは、福建人の集住地区として知られるザーファー（嘉富、ベトナム南部の発音では「ヤーファー」）通りに隣接しており、福建人や潮州人が多く住む地区である。また、平西堂に土地を売った黄榮遠置業公司とは、サイゴンで多くの土地を所有する著名な福建人商人・黄仲訓の家族組織「黄榮遠堂」のことである [Serizawa 2007]。

平西堂は当初、「平西潮福堂」として、この地域の潮州人と福建人に特化した教会であったが、その後、広府人の信徒が増えて「平西堂」と改名したという。例えば、張志江牧師の友人で、香港長洲島のカンバーランド長老会教会の牧師の息子である黄景福の家族は、家族全員が広府人であるにもかかわらず、家が平西堂に近く、説教では広東語の翻訳がついたので、平西堂へ通っていたという [張 2006 : 83]。

この平西堂の信徒のサブ・エスニック・グループの構成の変化のなかで、新たな潮州人教会の設立の道が開かれた。現在のホーチミン市の華人プロテスタント教会関係者の複数から聞いた話を総合すると、その設立の経緯は以下のものであった。

生命堂は、1966年に光中堂の分堂としてつくられた。なお、設立年については1969年の光中堂の特刊には、1960年に韋郁良牧師が政府に許可を求めて設置したという記述も残っている [中華国外佈道団南越基督教会 1969 : 7]。当初、平西堂の潮州人のグループが、潮州語で話すことのできる会所を平西堂の近くに設けた。その後、1969年に対岸の、ソムコイ（森拳）と言われて

いる地区、現在の第8郡に移り、1971年に同じソムコイのなかで再度移転して現在に至っている。現在の建物は、1971年に購入して礼拝堂に転用したものである（写真参照）。平西堂に大きく貢献した潮州人・李蔚波が、生命堂の設立にも大きく貢献した。なお、『活水南流』にも、現在の生命堂の建物は、李蔚波の夫人が大金を投じて購入したという記述がある〔張 2006：199〕。



写真 ベトナム・ホーチミン市、第8郡の運河沿いに並ぶ古い家屋。そのなかの1棟が生命堂。2011年8月筆者撮影。

生命堂をつくったのは、ソムコイの潮州人であるが、設立時に、李蔚波の家族のように、平西堂から来て手伝った潮州人の家族も数家族あったようである。なお1969年の光中堂の特刊には、生命堂の信徒の100分の98は潮州人と福建人で、日曜日の礼拝や祈祷会では潮州語を用い、広東語に翻訳しているという記述がある〔中華国外佈道団南越基督教会 1969：8〕。

平西堂の信徒から生命堂が生まれたことについては、次のような理由を聞くことができた。平西堂に広府人の信徒が増えた。福建人とは別に潮州人だけで独立したかった。許漢隆牧師の方針に反対して生命堂へ移った潮州人がいた。

生命堂の主任には、1967年に香港から倪宏奕という潮州人が来て担当した〔楊他 1971：34〕。倪宏奕はこの時点では牧師になっていないが、その後の経歴について筆者は未確認である。1970年には、香港の生命堂の楊濬哲牧師が来て、生命堂と光中堂で説教を行っている〔楊他 1971：37〕。

Ⅵ ベトナム・ホーチミン市（旧サイゴン）の華人プロテスタント教会の現在

1975年の南北ベトナム統一時点で、サイゴンの生命堂の責任者となっていた鄭作仁が、香港へ出国した直後に報告している文章によると〔鄭 1975〕、南ベトナムには13の華人プロテスタント教会の礼拝堂があった（表参照）。このうちホーチミン市には、次の8つの礼拝堂が現存している。宣道会梁汝学堂、宣道会平泰堂、平西堂、光中堂、救恩堂、仁恵堂、生命堂、新和東堂（かつての自由村福音堂）である。

鄭作仁が言及している「平仙浸信会」について、筆者は今のところ詳しい情報を得ていない。ある華人信徒から、「かつてはバプティスト会もあった」という発言を聞いたことがあるので、バプティスト会の礼拝堂が1975年以前にはあり、現在は無いということであろうか。

表 1975年4月時点でのベトナム南部（ベトナム共和国）の華人プロテスタント教会

教会名	礼拝堂名	責任者	備考
宣道会	宣道会	陳家榮・蘇得眞	梁汝学堂。
	平泰堂	蔡国雄	
	芹苴堂	葉錦泉・林雪鳳	カントー。
越南華僑基督会		会長：許漢隆牧師	
	平西堂	許漢隆	
	美拖堂	許漢隆	ミトー。1975年2月設立。
南越基督教会		会長：韋郁良牧師	
	光中堂	韋郁良	
	救恩堂	梁保泰	
	仁恵堂	黄家潤	
	生命堂	鄭作仁	
	自由村福音堂	楊緒昌	
	金蘭福音堂	邱樹華	カムラン湾。
浸信会	芽莊福音堂	黄家旺	ニャチャン。
			バプティスト会。
	平仙浸信会	陳徳全	

出典：[鄭 1975：6]

1975年の南北統一後は、外国籍の宣教師は国外退去となり、華人の資産家階級に対する圧力も高まったため、その後多くの信徒が出国し、華人プロテスタント教会の活動は一時停滞した。しかし、現在積極的に関わっている華人信徒のなかには、1980年代に入信した人もいる。1970年代から80年代にかけて、多くの信徒が出国するなかで、新しく入信する華人信徒もあって、教会が維持されてきたと考えられる。また光中堂の韋郁良牧師など、教会の指導層のなかに、出国しないで留まった人物が複数いたことも重要であったと思われる。

現在、この8つの華人プロテスタント教会の礼拝堂は、「越南（南方）基督教会総聯会」に属しており、ホーチミン市全体ではプロテスタントの礼拝堂は40以上ある。

華人プロテスタント教会では、日曜日の礼拝は広東語で行われており、場合によってはそれがベトナム語に翻訳されている。最大規模の礼拝を行っている光中堂では、礼拝には200人以上の参加者がある。ある信徒によると、ホーチミン市で商売をする台湾人が増えたため、宣道会梁汝学堂では彼らのために中国語での礼拝も行われているという。

ベトナム以外の国にいる華人からの資金援助も少なくないことが想像でき、平西堂や仁恵堂は、礼拝堂を近年大規模に建て直している。

また、2002年には政府の許可を得て、初めての中国語聖書がダナンで5,000冊印刷された。内容は、1919年に出版された『和合本聖經』に基づく『新標点和合本聖經』で、聯合聖經公会（United Bible Societies）が版權を持ち、繁体字版である [梁 2002]。

1975年以前、宣道会は中部のニャチャンに聖書学校をもち、生命堂に奉仕した牧師のなかにも、

ニャチャンで学んだベトナム出身の潮州人牧師がいた。そのニャチャンの聖書学校の敷地と建物は、今も政府が接収したままである。しかし、政府はホーチミン市第2郡に土地を用意し、2006年からプロテスタント教会が聖書学校を開いて学生を受け入れることを許可した。現在200人以上の学生が神学を学んでいるが、華人の学生は少ないという。

平西堂の主任をつとめた若い華人牧師は、現在香港の建道神学院で神学を学んでいる。1975年以前と同様、広西の梧州から20世紀の後半に香港へと拠点を移した宣道会とは、現在も密接な関係をもっていると考えられる。

生命堂の礼拝では今も広東語を潮州語に翻訳している。100人前後の礼拝参加者のなかで、潮州人は少なく、潮州人参加者の多くは高齢者だという。現在生命堂は、若い世代が潮州語を学ぶ夜学や、潮州語でのクリスマス会を主催している。

Ⅶ おわりに

ある広府人のプロテスタント信徒は、広府人と潮州人との違いを次のように説明した。広府人は雇われて働くので（「打工」）、仕事が気に入らなければ別のボス（「老闆」）のところに移るだけだが、潮州人は自分がボスにならないと気がすまないで、小さな屋台を引いてでも自分がボスになる。

またこの広府人信徒は、第8郡にある生命堂の潮州人信徒について、次のように説明をした。潮州人は川を泳ぐ勇気があるから、運河沿いに住んで精米などの商売に従事する。

これらの説明は、潮州人だけの教会を設立して支持する潮州人の行動を、潮州人に備わった性向から説明するものである。おそらく、この広府人と潮州人との気質の違いは、必ずしもそれぞれの民族集団に始めから備わったものではなく、民族集団間の関係や、それらの民族集団が置かれた政治的・経済的文脈によって生じたり、強調されたりするものだと考えられる。

香港とベトナム・ホーチミン市の潮州人が置かれた状況には共通する部分がある。それは、広府人が多数派であり、それに次ぐ規模のグループとして潮州人が存在するということである。多数派の広府人にとって、自分たちの地位を脅かす第2位のグループである潮州人は、積極的、精力的に行動する人々のように映りやすいということがあろう。

また、潮州人教会としての独立志向を、「自立」「自伝」「自養」の「三自」から説明することもできるかもしれない。もちろんこの「三自」は、プロテスタント教会が中国で土着化するためのスローガンとして、19世紀以来唱えられているものであり、広東省潮州地方に限らず、中国各地で強調されていることがらである。

階層化されて命令系統がはっきりしており、神父のカリスマ的権威が教会組織の中心にあるカトリックとは異なり、プロテスタントでは平信徒と聖職者のあいだの距離が短い。とりわけイギリス長老会の影響が歴史的に強い潮州人教会では、いわゆる「長老」が主導する理事会の権限が強く、理事会と牧師が不和になって牧師が交替したり、信徒のなかのグループが新たに独立した教会をつくって離脱したりすることが比較的容易に行われると想像できる。潮州人教会の独立志向は、歴史的に潮州人の信徒の教会組織がもつ、この「自立」の強さに由来するのではないか。

「自伝」とは、自身のグループのなかに伝道して、信徒を増やしていくことであるが、1960年代から70年代にかけてサイゴンの生命堂が、どのように潮州人の子弟に向けて活動していたかについては、未だ調査不足のためにはっきりしたことがいえない。ただし、ベトナムの潮州人信徒のなかから牧師になった事例が複数あり、現在も潮州語の教室が開かれていることから、潮州人キリスト教徒として人間形成を行う場面は、過去から現在まで多くあったと想像できる。香港の生命堂の牧師が来て説教をしたり、香港の聖書学校へ留学したりするなかで、チョロンという華人コミュニティを超えた、世界各地に広がる潮州人のネットワークに潮州人信徒が触れる機会も多かったと想像できる。

「自養」とは、信徒自身が教会を金銭的にサポートしていくということである。香港の生命堂の場合には、「抽紗」で儲けた潮州人商人が支えていた。サイゴンの場合、初期の平西堂や生命堂には、李蔚波一家の「湄江紙廠」の商売が順調であったため経済的な基盤があった [張 2006 : 82]。1950年代から60年代にかけて、チョロンの福建人や潮州人が自分たちの教会をつくって維持していくうえでは、富裕な福建人信徒や潮州人信徒の存在が不可欠であった。

本稿で見てきた歴史的な経緯から、サイゴンの生命堂の設立時には香港の生命堂の影響を受けたことが十分に考えられるが、今までのところ、当事者として設立当時の事情をよく知るようなインフォーマントには会っていないため、筆者は確かな事実としては伝えることができない。今後、さらなる情報の収集に努めたい。

加えて本稿では、華人プロテスタント教会のなかの「多数派」にあたる、宣道会に関する教会を主として紹介したため、少数派にあたる会派の教会についての紹介ができなかった。

ホーチミン市第5郡のアンズオンヴォン通りには、「基督復臨安息日会 (Seventh-Day Adventist Church)」の教会堂がある。1941年にチョロンで正式に教会が発足し、その後、洗礼を受けて加入した華人が増え、彼らの貢献によって1950年にこの教会堂が建てられた [中華聖工史編輯委員会 2002 : 292]。2006年に筆者が聞いたところでは、土曜日の集会には50数人の華人信徒が出席し、シンガポールの上位組織から派遣された牧師がベトナム語で集会を主宰し、華人信徒が広東語に翻訳するという。

船戸良隆は、第二次世界大戦中の苦難の時代のエピソードとして、コーチシナ西部における宣教の中心となっていたカントーの宣道会の教会の牧師が、教会のメンバーの多くを引き連れて突然、基督復臨安息日会へ転籍した事件を取り上げている [船戸 1991 : 327]。また『活水南流』には、1944年に郷里のベンチェに帰った許漢隆が、生活に困って、基督復臨安息日会の雑誌『時兆月報』の販売員をしたことが書かれている [張 2006 : 79]。これらのことから考えると、1940年代から50年代にかけての時代、基督復臨安息日会は宣道会に対抗する会派としてベトナム南部社会において大きな影響力をもっていたと思われる。両者の関係についても、今後の課題としたい。

文献

(日本語・中国語)

越南華人基督教会平西禮拜堂 2011『迎向未来 一平西教堂建立五十五週年慶典特刊 1956-2011』胡志明市：越南華人基督教会平西禮拜堂。

- 蒲豊彦 2003「宣教師、中国人信者と清末華南鄉村社会」『東洋史研究』第62巻第3号、34-62頁。
建道神学院跨文化研究系編 2009『拓荒南洋 -二十至四十年代建道校友的宣教路』香港：建道神学院。
胡衛清 2001「近代潮汕地区基督教伝播初探」『潮学研究』第9輯、148-174頁。
新加坡生命堂 制作年不詳「新加坡生命堂簡史」http://www.lifechurch.org.sg/about_history.html 2011年9月21日参照。
芹澤知広 2009「海外華人社会のなかの日本密教 -潮州系ベトナム華人の居士林をめぐる実地調査から」『総合研究所所報』（奈良大学）、第17号、55-70頁。
芹澤知広 2010「中国国外における中国人カトリック教会の再構築 -ベトナム華人社会の事例から」鈴木正崇編『東アジアにおける宗教文化の再構築』風響社、335-359頁。
中華国外佈道団南越基督教会 1969『中華国外佈道団南越基督教会特刊』西頁：中華国外佈道団南越基督教会。
中華聖工史編輯委員会編 2002『中華聖工史 上冊』香港：基督復臨安息日会華安聯合会。
張志江 2006『活水南流 -福音與越南』香港：宣道出版社。
鄭作仁 1975「憶越南、思肢体」『差傳聯訊』第4号、6-7頁。
林證耶 1981『翟輔民傳』香港：宣道出版社。
船戸良隆 1991「ベトナム」日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局、292-334頁。
楊煜樞・鄭文礎 1971「南越基督教会歴年大事摘記」『中華国外佈道団南越基督教会 五十周年紀念特刊』西頁：中華国外佈道団南越基督教会、19-38頁。
羅腓力 1997『宣道與中華』香港：宣道出版社。
賴德烈 (Kenneth S. Latourette)・雷立柏他訳 2009『基督教在華伝教史』香港：道風書社。
李金強・陳潔光・楊昱昇 2009『福源潮汕澤香江 基督教潮人生命堂百年史述 1909-2009』香港：商務印書館。
陸蘇河 1969「十五年来大事記」華僑基督教宣道会『華僑基督教宣道会十五週年紀念刊』西頁：華僑基督教宣道会、8-9頁。
梁家静編 2002『新旧訳聖經 (有註釈)』河内：宗教出版社。

(英語)

- Lee, Joseph Tse-Hei 2003 *The Bible and the Gun: Christianity in South China, 1860-1900*, London: Routledge.
Serizawa, Satohiro 2006 "Chinese Charity Organizations in Ho Chi Minh City, Vietnam: The Past and Present," Khun Eng Kuah-Pearce and Evelyn Hu-Dehart (eds.) *Voluntary Organizations in the Chinese Diaspora*, Hong Kong: Hong Kong University Press, pp. 99-119.
Serizawa, Satohiro 2007 "The Fujian Chinese and the Buddhist Temples in Ho Chi Minh City, Vietnam," Yuko Mio (ed.) *Cultural Encounters between People of Chinese Origin and Local People: Case Studies from the Philippines and Vietnam, Proceedings of International Workshop*, Tokyo: Institute for Languages and Cultures in Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp. 65-75.

付記

2006年9月の実地調査は、平成16年度～19年度・科学研究費補助金・基盤研究（A）「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類的研究」（研究代表者・東京外国語大学・三尾裕子教授）の研究分担者として実施した。2011年8月の実地調査は、平成22年度～24年度・科学研究費補助金・基盤研究（A）「東南アジア大陸部における宗教の越境現象に関する研究」（研究代表者・京都大学大学院・片岡樹准教授）の研究分担者として実施した。この2つの研究課題の関係者に謝意を表す。